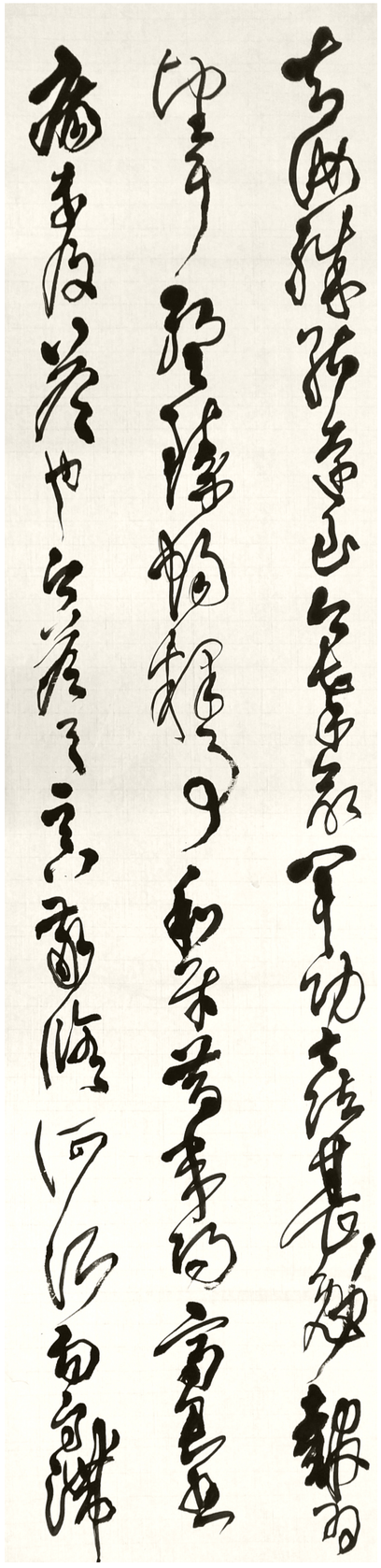
墨友

第1号
発行所
東北大学学友会書道部
editor@shodo.org.tohoku.ac.jp

今月の臨書「王鐸」

▼ 臨書　「王鐸」



（文責　堀江）

今月の創作「常建詩」

▼ 創作　「常建詩」

（文責　堀江）

書論「王羲之の要素」

（文責　堀江）

古典紹介

「九成宮醴泉銘」

九成宮醴泉銘は、唐の楷書四大家が一人、欧陽詢の手とされています。貞観六年（六三二）に太宗皇帝が九成宮という離宮へ避暑に赴いた際、宮の傍らに湿り気のある所を見つけ、杖を突きさすと甘酒（醴）のように甘く清らかな水が沸きだし泉となりました。これを吉事とした太宗皇帝は、記念に碑を建てるよう命じます。魏徵が命じられ撰進した銘文では、晴らしいかに九成宮が古宮殿にも劣らず素晴らしいかどれほど太宗皇帝が徳の高い君子であるかを千二百字に醴泉銘にわたって謳われた古典としての九成宮の碑に刻まれます。

内容は、側縦長な字形、縦横の空間が互いに凛しく、強調されるように、横画が右上がりに起伏し、点字の上に見える勢いが、縦画の右上がりに欠けるところ、接触の角度が、縦画の左上がりに欠けるところ、触れさせる様子が、縦画の右上がりに欠けるところ、印象を与える横画が、縦画の右上がりに欠けるところ、象徴する人間の背丈が、縦画の右上がりに欠けるところ、人間の背丈を表す縦画が、縦画の右上がりに欠けるところ、縦画の右上がりに欠けるところ、縦画の右上がりに欠けるところ